

県研究主題

児童一人ひとりの生きる力をはぐくむ指導計画及び指導の工夫・改善

提案1

提案者 池田 孝・前島 潤（横浜地区）

<研究主題>

やっぱりいいね・・・『総合』って

～子どもが変わる！学級・学年がつながる「総合的な学習の時間」をつくる協動的な学び～

1 提案内容

(1) 自己有用観と仲間の大切さを感じたAさんの育ちとそれを支えた教師のみとりやしかけ

① 学年 単元名 時間数

5年生「芝生でウキウキ ベンチでニコニコ みんなでGO！」（総合60時間 国語12時間）

② 単元目標

校内の環境改善活動やM愛護会の方とのふれあいを通して、友達や地域の人と知恵を出し合い、力を合わせることで、目の前の壁を乗り越えられることに気付くとともに、自分や友達の良さや協力することの大切さを感じたり、周りの人のために行動する喜びを味わったりし、自分たちの生活を自らの力でよりよくしようとする事ができる。

③ 単元の流れと学習のポイント

ア 「学校のみんながほっとする場所をつくろう！」

学校の一部を芝生化出来ることになり、どこに芝生を植えるか計画し、活動に取り組む。

イ 「もっとほっとする場所にしよう！」

・想像図を描いてイメージを共有した。

・想像図にベンチがあったことからベンチ、テーブル作りを行った。

ウ 「完成したものを発信しよう」

・ニュース番組を作り全校に発信した。

・お世話になった方へ感謝の会、完成式を開いた。

(2) 仲間や地域の方々とともに本気で地域に貢献しようと学習を進めた学級の変容

① 学年 単元名 時間数

6年生 「ふるさとをもっと豊かにプロジェクト～市民の森のガイドブックで発信！」
（総合58時間 国語12時間 道徳2時間）

② 単元目標

市民の森の自然にふれ、そのよさを感じ取る活動を通して、自然を守る大切さや、自然と共生する意味、価値に気付き、市民の森の保全に努力している方々と協働しながら、地域の自然に対する自分の願いを実現するために行動する事ができる。また、自然と共生していくために自己の生き方を考える事ができる。

③ 単元の流れと学習のポイント

ア 「ふるさと」を見つめ直し、自分たちができるかかわりを見つけよう！

・地域巡りから市民の森に注目し、話し合いからガイドブック作成をすることになった。

イ 市民の森のガイドブックを作ろう！

・ガイドブック作成に向けた取材をする。

・製本するための資金作りは、手作りミサンガを売って作った。

・市民の森にガイドブックを設置した。

ウ ふるさとの自然を未来につないでいこう！

・「はばたきの会」でふるさとの自然の大切さを地域に発信した。

2 協議内容

- ・他教科との関わりを教えて欲しい。

→本単元の道徳の2時間については、子どもの思いが高まったり、振り返ったりする場面で取り入れた。最初と最後に取り入れた。理科・社会などで繋がりやすい。教科から、総合的な学習の時間に入っていく事例もある。

- ・卒業後のベンチやガイドブックの扱いはどうしているのか。

→ベンチについては、担任がメンテナンスをしている。森の愛護会との共作などでしっかりとできているが、担任が管理し、風化したら撤去することになっている。ガイドブックは、公民館に置かせてもらっている。子ども達の強い思いで残しておきたいという気持ちからそうなった。

- ・バードウォッチャーの「ガイドブック森のためになるのか。」は、仕掛けだったのか。

→オーバーユースのことはどこかで取り扱いたいと思っていたが、偶然だった。タイミングを考え、子ども達に投げかけた。

- ・芝生の単元の導入を詳しく聞かせて欲しい。

→芝生で遊びたいという強く共通の思いがあった。クラスの実態や子どもとの信頼関係もあり、受け止めていった。管理職とも相談して行きながら取り組んだ。

- ・地域の方々からの評価について

→子ども達の心をゆさぶった言葉が館長さんの「期待しています。」だった。この言葉が子ども達に緊張感を与えた。担任の「自信をもって発行できますか」の言葉から地域の方に見てもらうことになった。地域の評価は優しいものであった。

- ・芝生単元での具体的な見取り方法と価値づけ、育ちについて

→見取りの方法は、子ども達と行動することで行動や発話で感じたことや振り返りカードやノートなどからした。子どもに情報を聞いて集めることもした。振り返りカードにコメントして価値つけていたり、ノートに書かれた友達を認める記述を見せたりした。今回発表するに当たり、高校生になった子どもにインタビューした。「あの活動により、自信が生まれた」などの自己有用感をもつ言葉が多くあった。

3 まとめ

「しかけ」という言葉は文部科学省も使っている。ゆさぶりをかけたり、山場を設置したり、しかけは重要である。総合的な学習の時間削減にあたって、他教科の関連を図ることが必要であろう。また、ねらい、目的がある体験なのか、見合ったものであるのか見直すことが大切である。ものづくり単元は、卒業後の扱いが課題となり、難しさがある。現在、総合的な学習の時間では、整理分析をどう位置付けていくか、弱いところとも言われている。育てたい子どもの姿をイメージしてどのように評価するか、それに併せて、どのような学習内容を計画するか、これからの総合的な学習の時間に突きつけられている。

提案2

提案者 青柳 和富（湘南三浦地区）

<研究主題>

児童一人ひとりの生きる力を育む総合的な学習の時間を目指して
～「田んぼ大作戦・田んぼつながる活動」にチャレンジしよう！～

1 提案内容

(1) 学年 時間数

5年生 5クラス 145人による学年総合（時間数 52時間）

- ① 田んぼづくりを通して学んでいく田んぼ体験（4月～6月）
- ② 個人の興味・関心に基づく調べ学習（7月～9月）
- ③ 田んぼからつながる活動発展的な学習（10月～3月）

(2) 単元目標

- ・自発的に行動することができる環境を与え、自ら考え作り出すことができる子どもを育成する。

(3) 実践報告

- ① 田んぼパワーアップ作戦→田んぼを作り直す活動。田んぼの下には昔の用務員の人の家がでてきた。農家の人のアドバイスから土嚢をつんで田んぼを上へのぼす。

- ② 解決すべき課題が自然発生
 - ・子どもたちの働き方の感覚のズレ→他の児童のふりかえりから活動が変わってきた。
 - ・泥を壁になげる下級生→ポスター・全校朝会で呼びかけ
 - ③ 田んぼにつながる発展的な活動
 - ・発生した生き物やルールについてなど追及したいことを夏休みにレポートにさせた。
 - ・主体的に子供たちが投票により5つのテーマを決める。中でも池づくりの活動は先生方を巻き込み、活動の山場であった。また、下級生が手伝いに来るなど、活動が全校に広がっていった。しかし、未完成のまま時数が足りなくなり、残りの活動は休み時間に。
- (4) 成果と課題
- ・子どもたちの興味・関心に基づく活動だったのでイメージがしやすい活動であった。
 - ・自分たちの成長を実感できる活動であった。
 - ・池作りの活動が終わらず、活動は6年生になった現在も続いている。

2 協議内容

- (1) 子供たちの姿が出ていてわかりやすかった。子供たちがこんな力がついたという感想を書く児童が多くいるが、なにかしなかけがあったのか知りたい。
- ・どういう力がついたかとピンポイントで聞くことが多い。特にしなかけはないが、作業が終わるごとにその日の振り返りをして、「今日はよく協力ができたね」など教師が価値づけをしていった。
- (2) 学年5クラスの総合で意思決定が大変だったのではないかと。学年総合の大変なところ、良かったところを教えてほしい。
- ・難しいところは教師が5人いると方向性がそれぞれで、意思決定に時間がかかった。またグループごとの活動なので、時間割の変更がきかないところである。良かったことは、20代の先生が多い中で、みんなで総合を考えられることができたので、先生たちの勉強にもなった。若い先生には勉強になったと思う。子供たちも学年で大きなものが作れた達成感があった。
- (3) 学校に残るものが作れた充実感があったのではないかと。しかし、伝えるグループなどは総合ではなくてもよかったのでは。また、145人でやる大変さと他のグループの様子も教えてほしい。
- ・伝える活動グループは池以上に盛り上がっていった。伝えるための劇を作った。生き物グループも劇づくりをした。どのグループも結果的に時間がなくなり、休み時間に活動した。学年をばらしたグループにしたことで、逆にクラス(先生)ごとの温度差がなくなった。常にグループの活動は教師2人以上で取り組むようにした。若い先生がもっと教えられるようになってほしいという意図があった。
- (4) 資質能力に米づくりが「ものづくり」になっているが、「環境」だと思ふ。内容面をもっと明確にしていれば、グループの活動内容が明確になっていたのではないかと。
- (5) 学習内容との関連が読み取れない。田んぼを材にした時に子供たちに何が学べるのかという分析はしたのか。その分析がもっとできていれば整理・分析につなげ、その後の活動につながったのではないかと。
- ・田んぼからつなげるプロセスについては、夏休み前に子供たち一人ひとりとやりたいことを聞き出し、すりあわせをした。つながりとしてはあったと思う。
- (6) 子供たちにどんなことをやりたいかという問いにジャンルを設定したのは教師か?
- ・やるが多すぎたため教師がジャンル分けし、子どもたちが自分でやりたい活動をするようにした。しかし、子供たちの意図は教師の言い方によって偏りがでてしまった。
- (7) メダカや合鴨と言っていた子どもたちの活動が途中で微生物に代わっているがなぜか。
- ・活動の中で微生物の活動に力を入れている子供たちの意見に流れていった。

3 まとめ

- (1) 提案について
- 経験の浅い先生が多くいる中で、総合的な学習の時間を中心として若い先生を育てていくという素晴らしい提案だった。
- (2) 子供のみとり方について
- 子供の変容は総合的な学習の時間の授業だけではみとれない。普段の時間の中でも見る必要

がある。さらにそれを学年でばらして見とることは非常に難しい。

(3) 活動について

教師の意図も入ってくる。時間も限られてくる。グループにばらすことで緊急にやりたいこともできない。学年で取り組む総合的な学習の時間の難しさなのだと思う。はっきりと何を学びたいのかということが見えてきたら、何を学ぶのかということがはっきりしてくる。体験を非常に重視している実践であった。

(4) 子どもが本気になる場面

子どもが本気になる場面は①思いを阻む場面②思いを後押しする場面③経験のズレの場面である。

4 グループ協議

(1) 新学習指導要領に沿った全体指導計画・年間指導計画等の作成について

- ① ある程度学年で学習する内容やテーマを決めている学校が多い。全体計画を作ることで学習を継続してできる、教科との連携がしやすくなるなどのメリットがある。全体計画作りでは、他教科との関連を考えていく大変さがある。
- ② よい実践があっても事例集がなく、紹介されていない。学校全体で総合的な学習の時間をどう作るかという雰囲気作りが大切である。また、学区をまわり教材開発をすることも大切である。
- ③ 各クラスで計画を立て、途中で意見を交流させ、年度末に反省するような流れを作ると良い。すぐに停滞してしまうのでシステムとしてそのような流れを作るべきである。
- ④ 学校全体での協力が大切である。また学級ごとに子供が違うので、同じことをするのではなく、学習材を見極め、教師側が学習材にどうかかわるのが大切である。

(2) 探究的な学習活動の充実について

- ① 子どもの意識のズレなどを上手にを使って子供の心をゆさぶることが大切。老人ホームを学習材にした実践例、老人とのふれあいを目的に訪れた子どもたちが、自分たちだけが楽しみ、お年寄りには楽しんでもらえず終わってしまった。自分たちと老人との意識のズレから次回は老人を楽しませることが大切だと気付く。
- ② 目標やゴールを意識するのは大切だが、教師が導きすぎると探究にならない。失敗や困難を与えることが大切である。他教科より自由に学習材を選ぶことができ、その学習材について考えることが探究的な学習につながる。
- ③ 探究のスパイラルや整理分析などに注目していけばいいが、本当に課題が子供の切実感につながる、意義な課題になっているのが大切。本物とのふれあいも必要である。
- ④ 何の問題を解決しようとしているのかを毎時間明確にさせることが大切。整理分析に KJ 法などツールを使うよさがあるが、ツールの独り歩きにならないように有効な方法を考えながら使うことが大切である。計画の段階で探究の過程が何回転しているかを意識するとよい。
- ⑤ 問いや課題が子供のものになっているかを意識することを第一に考え。教師も子どもも今何をやっていて、何を学び、何を力としてつけているのかを意識していることが大切である。

5 まとめ

- (1) 総合的な学習の時間では算数のようにステップを踏んで学習を組み立てるのか、国語のように長いスパンで繰り返しながら授業を作るのかを考える。総合的な学習の時間を進める中では学習対象がとても大切である。学習対象は価値のあるもの、繰り返せるもの、身近なものでなければならない。今回の提案は学習対象がよかった。

学習を探究的にしていくには、情報を収集して、それをどう整理分析し、さらにそれを子ども問題にしていくことに力を入れていかなければ、探究的な学習にはならない。

- (2) 地域や子供の実態が違う中で、様々な総合的な学習の時間の実践報告を聞くことはとても面白かった。総合的な学習の時間の面白さを伝えようとする教師の熱意を感じた。

時数が減って苦勞しているが、評価規準等を定めることはもちろんだが、とにかく授業の中身、計画作りというものがあっての評価である。

評価においては、育てようとする資質や能力及び態度と評価規準を関連付けて規準を作り、明記するよう、「総合的な学習の時間における評価方法等の工夫改善のための参考資料（小学校）」を参考にして評価を行ってほしい。